

2024年6月12日 Vol.225

6月IPOは宇宙関連企業から

今年も間もなく折り返し地点となります。半導体関連銘柄を中心に堅調に推移してきた令和6年の株式相場ですが、残念ながらグロース市場は調整が続いてきました。その結果、IPO市場にも影響が出ており、昨年は96銘柄、今年は2月から5月にかけて27銘柄が上場を果たしていますが、昨年よりIPOのペースが鈍い印象です。6月は既に2銘柄が上場。まず5日にIPOしてきたのが宇宙関連のアストロスケールホールディングス(186A)。同社はスペースデブリの除去サービスや人工衛星寿命延長、点検・観測等の軌道上のサービス事業を展開する宇宙ベンチャー企業。現在のビジネス対象は政府やJAXAなどの宇宙機関ですが、今後は民間企業にも取引先が拡大すると見られます。公開価格850円に対して初値は1281円で宇宙ビジネスへの期待感もあってかまだ利益は赤字ではありますが、公開価格を50%上回る初値がつかしました。

これまで宇宙関連ベンチャーとしては昨年4月のispace(9348)、同年12月のQPS研究所(5595)がありますが、前者が公開初値の2.37倍、後者が同じく5.78倍となったこともあり、停滞中のグロース市場人氣が復活する契機となるのか、今後の行方が気になるところです。リスクマネーの集積場としての株式市場は絶えずフロンティアを求めて資本が入って参ります。現在は米国が先駆する生成AIサービスとそれを実現するためのNVIDIAを筆頭にした最先端半導体企業のリスクマネーが集まっていますが、その結果としてNVIDIA株の時価総額は3兆ドルを超えるまでに拡大しました。日本株全体(約1000兆円)の半分近くを占める時価総額となっており、その凄まじさを感じてしまいます。NVIDIAに限らず米国ではアマゾンが先行投資期に大きな赤字を計上していた時期もありました。宇宙関連ビジネスもまだまだ先駆投資期にあります。本来の投資というのはこうしたフロンティアへの挑戦を支援するということでもあります。

そうした意味でグロース市場には短期的な視点ではなく長期的な視点での投資に値するような国家大系を実現させてくれる民間企業が今後より多く登場する必要があります。そしてそうした企業を応援していく多くの国内外の投資家のホットな視線が注がれる必要があります。残念ながら日本発GAFAMのような企業がなかなか現れませんので、例えば投資会社となったソフトバンクグループは海外に向けてダイナミックにリスクマネーを投じており、半導体設計会社アームへの投資では一定の成果を上げつつあります。

とは言えトヨタをはじめとした日本経済の屋台骨となっている既存の上場企業だけでなく今後の成長を担う今後のIPO企業にも大いにチャンスと期待があります。残念ながら多くのIPO銘柄には短期投資家の逃げ足の速い資金しか投じられていないようですが、IPO銘柄の中から今後、次代を担う企業が登場することを大いに期待したいと思います。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)